

人生や歴史は、ひとつの円をぐるりと回っているように、同じ場所には二度と戻らない。繰り返しているように見える日々も、必ず新しい地点へとたどり着いていく。そしてそれは、まるで螺旋階段を少しずつ上がっていくような感覚である。仕事、学び、人間関係において「また同じ失敗だ」「昔と同じ景色だ」と思ったときでさえ、実はほんの少し異なる“今”に出会っている自分に気づくことがある。

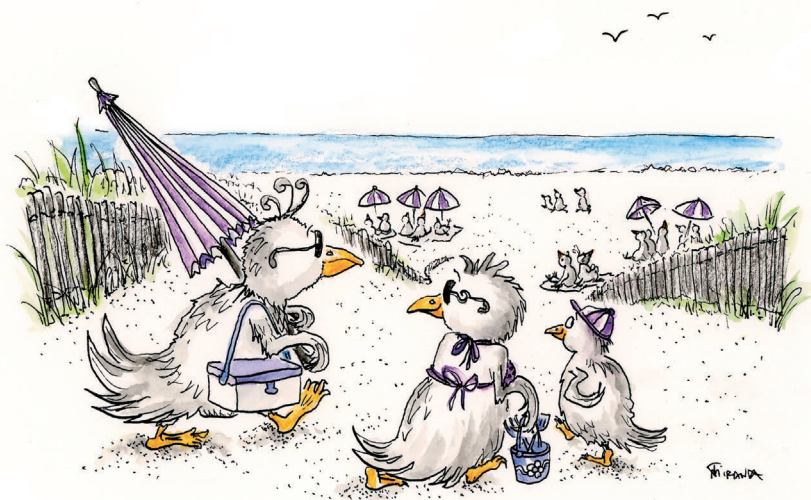
「螺旋」とは、単なる形にとどまらず、私たちの心や生き方に深く刻まれた「進化」のシンボルである。例え

このイメージは、人間の営みそのものにも通じている。歴史は戦乱や繁栄を幾度も繰り返すが、全く同じことは二度と起きず、社会も人も一歩ずつ前へと進んでいる。科学技術も、過去を土台に次の段階へとステップを重ねていく。時には失敗や停滞もあるが、それさえも大きな螺旋の中の一工程である。

一日の終わり、ふと今日を振り返ると、何も変わらないように思えても、目に見えない小さな“螺旋”を少しずつ上へと進んでいる。その積み重ねが、やがて思いもよらぬ場所へ私たちを連れていくのであろう。私たち一

数 | 理 | の | 窓

螺旋のかなたへ — 進化を描く日々



ば、生き物のDNA。顕微鏡の先の小さな世界で、二重螺旋構造が優雅に編み込まれている。この構造が生命を未来へと受け渡し、ほんのわずかな変化や偶然が新しい命の多様性を生み出していると考えれば、螺旋が持つ力強さと神秘に圧倒される。

自然界を見渡せば、巻貝の殻の模様、渦潮や台風の渦、樹木の葉が重なる螺旋も目に入る。こうした形は、効率よく光や空気を取り入れたり、成長を支えたりする合理的な解として自然が選り取ったものである。さらに宇宙に目を向ければ、私たちの銀河系そのものも壮大な螺旋を描いている。身近な小宇宙から遥かな大宇宙まで、螺旋は命や物質が「ただ回るだけ」でなく、進化し続ける動きの象徴である。

人ひとりも、自然界や宇宙と同じリズムで、繰り返しながら進化する存在であると気づかされる。

「螺旋」という形は、世界を美しく見せてくれる不思議な「アナロジー（類推）」である。今を生きる私たちも、これまでの歩みと未来とを結びながら、自分なりの「螺旋」を描いて次の一步を踏み出していきたい。時に、過去に戻りたくなったり、未来を不安に思う日もあるかもしれない。しかし、螺旋の歩みを思い出すことで、今の自分にもきっと意味ある変化が蓄積されていると信じられる。目には見えなくとも、確かに積み上がる経験が、私たちを新たな可能性へと導いてくれるだろう。—そんな希望を胸に、日々を重ねていけたら素敵だ。

(井手 芳男)